

■ 編集だより

編集後記

何のことやら意味不明の文章を、どこかに書く度に、後からそっと誰かに叱られる。自分のその時々を思いを、ぐっと真面目に、ときには低級に、書き留める癖は抜けない。私たち編集委員は、それはもう、実は大変で、毎月集合し、あれこれ思案し、今度はこのように編集後記まで回ってきて、まあ、この場だけは何を書いてもいいですよ、と言ってくれるので、ならばと今回も、好き放題を並べてみるのである。

その1. 「自己評価は当てにならない」「がんばろう、島根！」

「自己評価」時代が流行のように、病のように、まるで正しい評価方法のように、大手を振って、世にまかり通っている。大学もしかり。巷、世間、俗界、通常、共通感覚的、常識、一般的などなど、「平均的娑婆」ではどうみられるか、この方法。「私は今、大学でこのように頑張っていますが、このようにも頑張っていないので、Aでもなく、Bかな？、でも家族も養わないといけなし、やっぱり、自分は頑張っているわな、まあ、Aか」などと、事細かにチェックしていく作業。膨大な作業、作業。そのまた自己評価表のチェック項目を作成するためのワーキング委員会の立ち上げ、大学学部間での共通項目と学部単独の項目の色分け作業。文系と理系。特殊な一角である医学部教官の評価。

筆者が所属しているような地方の大学医学部には、ただでさえ、学生が残らず、教官もやりたがらず、経済も低級で、雑用が多く、もう、教授も辞めていく時代、教授のなり手さえいなくなってしまうような、そんな現状にあるなか、御上の命は追い打ちをかける、かける。自己評価もその一つ。「自己評価？」、「もう、いい加減にしてほしいな、いつでも辞めてやる、そんな、なぜ？、医師不足なのに、どこにでもいけるのに。」と、大抵はみんな思っている、ほやき合っているというのに。

「自己評価は当てにならない」。自身の足下をじっくり眺める、そんな数分も必要だが、他者からの評価とは、大抵は大きく外れている。自己愛は正常発達の一経過。でも「がんばろう、みんな！頑張ろう、島根！」。イチローも、やっぱり最後に、頑張ったしなあ。

その2. ニッポンは成熟した国といえますか？

総合病院精神科への勤務を拒む医師が、若手が、増加してきたように思う。昔は、どちらかという、がんばりタイプの医局員、優秀タイプが派遣され、選ばれた医局員もまんざらではなく、むしろ誇りにさえ思っ、一生懸命頑張ってきたし、頑張っている。過酷な労働環境にも耐え、夜遅くまでリエゾンその他。しかしここにきて医療界の実情が急速に変化し、精神科救急、患者や家族の変化、外来数の急増、などなど、じっくりと腰を据えられぬ。総合病院精神科の閉鎖。深刻な状況が続くそうである。これなども一医師の、一大学の、一地方の判断や能力を遙かに超えた課題である。

なんともやりきれない気持ち、天を仰ぎて憤然たり、といった念慮を抱かざるを得ない心境に陥ること、しばしばである。日本丸の歩みはこんなものでいいのでしょうか？ニッポンは成熟した国といえますか？

最近はしんどいのである、こんなことではいかんと、前を向いたり、後ずさりしたり。この繰り返しが人生だ、なんては決して思いたくない。明るく生きたいのである、みんな。

その3. 「サッカーに戦術などあるかいな」

今でも筆者、本音は「サッカーに戦術などあるかいな」と思っ、サッカーク観戦は、いつもそんな調子で楽しんでます。サッカーは前に蹴って、たまたまソコにいた選手や、玉転がしのうまい選手が蹴って、入った、入らんかったを競う、百姓一揆にすぎんもんねと。ゴールの大半はアーチファクトでしょ、違う？、バックのミスや、シュートが運良く枠に入ったらゴールであって、つまり全部予想外の得点やと思うとるわけです。

この文章は編集後記とはいえ、学術誌には一見相応しくなさそうではあるが、「基本と発見」とについて、もっと言えば、精神症候学（基本）をもっと勉強し、自分としては新しい真実、予想外の知見（発見）を、まあ、いつもワクワクして診療しているし、そんなことをイメージして書き記したつもりなのである。

堀口 淳